

Human Behavior and Evolution Society Japan

2nd annual conference

The University of Tokyo

December, 9-10, 2000

人間行動進化学研究会 第2回研究発表会
2000年12月9～10日

12月9日

(東大駒場キャンパス 図書館視聴覚ホール)

- 13:00～14:00: 特別講演1
- 14:00～14:20: 休憩&ポスター設置
- 14:20～15:20: ポスターセッション
- 15:20～16:20: 特別講演2
- 16:20～16:40: 休憩&ポスター
- 16:40～18:20: 口頭発表1

12月9日夜

懇親会

18:30～20:00

駒場キャンパス3号館2階209号室

12月10日

(東大駒場キャンパス 図書館視聴覚ホール)

- 9:30～10:30: 特別講演3
- 10:30～10:50: 総会
- 10:50～12:10: 口頭発表2
- 13:00～16:30: 公開パネルシンポジウム

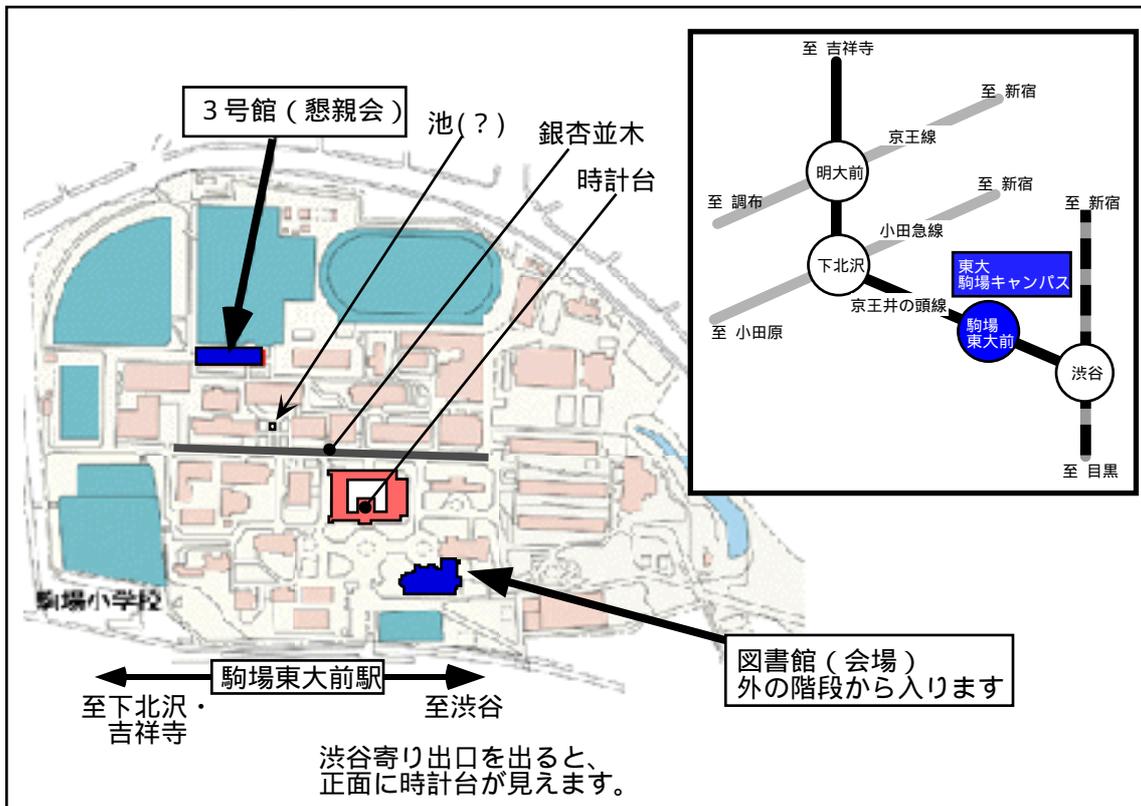
参加費

会員: ¥1000 非会員: ¥2000 (会員登録費を含む)

事務局連絡先

Tel: 03-5454-6266/4332, Fax: 03-5454-6266

E-mail: hbes-j-request@darwin.c.u-tokyo.ac.jp



12月9日 午後の部 (13:00~18:20)

13:00~14:00 特別講演1 (座長:長谷川真理子)

顔の初期知覚過程:表情と視線をめぐる
吉川左紀子(京都大学)

14:00~14:20 休憩&ポスター設置

14:20~15:20 ポスターセッション

社会的意識決定 多数決原理の適応基盤
藤田政博(北海道大学大学院文学研究科)・田村亮(北海道大学文学部)
亀田達也(北海道大学大学院文学研究科)

多数派同調バイアスの適応基盤
中西大輔(北海道大学文学研究科)・亀田達也(北海道大学文学研究科)

赤信号、みんなで渡れば・・・?
松田いづみ(東京大学教養学部)・竹川敦(東京大学教養学部)

エスノコンセプトとしての「文化」
桜井芳生(鹿児島大学法文学部)

シミュレーションによるモデリング:
社会心理学におけるシミュレーションの利用(1)
高木英至(埼玉大学)・工藤恵理子(青山学院女子短大)
神信人(淑徳大学)・林直保子(関西大学)

シミュレーションが拓く可能性:
社会心理学におけるシミュレーションの利用(2)
林直保子(関西大学)・神信人(淑徳大学)
工藤恵理子(青山学院女子短大)・高木英至(埼玉大学)

動物行動学的見地から見た人間行動の諸観察例
宮川友博(神奈川県立足柄高校)

話者間の距離とジェスチャーにおける空間表現
細馬宏通(滋賀県立大学人間文化学部)

「視線」って何? Joint Attentionに関する実験心理学的検討
千住 淳(東京大学大学院総合文化研究科)

ご冗談でしょう、サロウェイさん:出生順位にまつわるエトセトラ
小林哲生(東京大学大学院総合文化研究科)・西真理子(聖心女子大学文学部)
平川雅子(武蔵野女子大学人間関係学部)・老沼妙子(武蔵野女子大学人間関係学部)
長谷川寿一(東京大学大学院総合文化研究科)・倉島治(東京大学大学院総合文化研究科)
大六一志(武蔵野女子大学人間関係学部)

青少年・若者の犯罪動向をどう見るか? -凶悪化か未熟化か
長谷川寿一(東京大学大学院総合文化研究科)

15:20~16:20 特別講演2 (座長:長谷川寿一)
ゲノムという「こと」と生物という「もの」 齋藤成也(国立遺伝学研究所)
16:20~16:40 休憩 (&ポスター)
16:40~18:20 口頭発表1:性差・性淘汰 (座長:内田亮子)
16:40~ 空間認知能力-脳の性分化&“オプティマル”なテストステロンとは? 内田亮子(千葉大学)・丸山裕史(三菱総研) ・Richard G. Bribiescas(Yale大学)・鎌田倫子(千葉大学) ・KTP(慶応双生児プロジェクト)
17:00~ 空間認知能力の性差ホルモンと文化人類学的視点からの解釈 鎌田倫子(千葉大学文学部)
17:20~ ヒトにおける配偶者の好みにみられる性差:交際相手募集広告の分析から 小田 亮(名古屋工業大学)
17:40~ 性的嫉妬の性差に及ぼす年齢の効果 富原一哉(鹿児島大学)・川原歩(鹿児島大学)
18:00~ 嫉妬、女性のコントロール、殺人 長谷川真理子(早稲田大学)

12月9日 懇親会(18:30~20:00)

<p style="text-align: center;">駒場キャンパス3号館2階209号室 会費 一般(含:学振特別研究員)3000円 学生1500円</p>
--

12月10日 午前の部 (9:30~12:10)

9:30~10:30 特別講演3 (座長:平石界)
社会的意思決定と適応 亀田達也 (北海道大学文学研究科)
10:30~10:50 総会
10:50~12:10 口頭発表2:挑戦的アプローチ (座長:安藤寿康)
10:50~ 進化ゲームは人間行動の何を表現するのか 高橋亮 (東京大・集団生物)
11:10~ 言語の適応度を測定したい人のために 野澤元 (京都大学大学院)
11:30~ 適応するほど遺伝率は低い? 4枚カード問題による進化心理学と行動遺伝学の橋渡しの試み 平石界 (東京大学大学院)・安藤寿康 (慶應義塾大学)・ 大野裕 (慶應義塾大学)・長谷川寿一 (東京大学大学院)
11:50~ 遺伝する行動は何か 安藤寿康 (慶應義塾大学)

12月10日 午後の部 (13:00~16:30)

13:00~16:30 公開パネルシンポジウム
『人間への生物学的アプローチと社会・倫理』 パネリスト (五十音順): 安藤寿康 (行動遺伝学、慶應大) 後藤弘子 (刑法学、富士短大) 松原洋子 (科学史、お茶の水大) 和田幹彦 (民法学、法政大) ほか。 司会: 佐倉統 (科学技術論、東京大)

特別講演

「顔の初期知覚過程：表情と視線をめぐって」 吉川左紀子（京都大学）

ヒトの顔にはコミュニケーションに役立つ多くの情報が含まれている。とくに表情や視線・顔向きは他者のその時々的心情の状態を伝えるだけでなく、どこに重要な情報があるか（視線・顔向き）、それはどんな性質のものか（快・不快表情）といった環境内の事象に関する情報も伝達する信号として機能している。これらを正確に処理する機構をもつことは、ヒトの生存確率を左右する重要な要因であったと考えられる。こうした推測を裏付けるように、最近の認知行動実験のデータはヒトがきわめて迅速・正確に、他者の顔が発する社会的信号を処理していることを示してきた。本講演では視線・顔向きに対する定位反応、表情の初期知覚、および視線・顔向きと表情の知覚における相互作用に関する最近の研究について紹介したい。これらの研究から示唆されるのは、ヒトにおける顔・表情の認知機構が、「自己にとっての価値」によって処理精度が調整される、すぐれた特徴をもっているということである。

ゲノムという「こと」と生物という「もの」 斎藤成也（国立遺伝学研究所）

われわれが森羅万象を把握するとき、モノとコトという二つの視点に分けるができる。コトが論理的に記述できる情報の世界であるのに対して、物質そのものであるモノはその記述が簡単ではない。一方、構造はモノで機能はコトであると考えたくなる。しかし論理的な記述のしやすさを考えると、構造のほうが簡単だ。DNAを考えてみよう。その構造は二重らせんであり、4種類のヌクレオチドの非周期的結晶だ。そのエッセンスはA,C,G,Tという4文字のつらなりで表わすことができる。しかしDNAが載せているはずの「遺伝子」の「機能」が漠然としている。ゲノム配列の中に埋まっている遺伝子の機能を情報のレベルあるいは論理構造で記述しようとする、著しい困難にであってしまうのだ。ここに、遺伝子型と表現型をどのようにしてつなげるかという、遺伝学における大問題が存在する。これに注意を払いつつ、類人猿ゲノム計画Silverのちゃちな現状と遠大な目的をご紹介します。

社会的意思決定と適応 亀田達也（北海道大学文学研究科）

近年、意思決定研究の中核をなす合理性観が大きく変化している。1980年代以降、意思決定研究の基調となったのは「論理整合性」としての合理性(Tversky, Kahneman)だった。しかし、過去5年ほどの間に「外的環境への適応」としての合理性 (Simon, Gigerenzer, Johnson, Payne)の方向に、研究パラダイムが急速にシフトしつつある。こうした新たなパラダイムの展開は今のところ非社会的な場面における個人の意思決定に留まっているが、中・長期的には、進化ゲーム論との連携を軸に、頻度依存的な社会的意思決定にも当然及ぶだろう。本講演では、こうした意思決定研究のパラダイムシフトを、私たちのチームがここ2年ほど行ってきた研究を題材に例示する。具体的には、「人は他者の行動をどのように参照しながら決定を行うのか」という問いを中心に、適応的な集団意思決定、社会的学習における同調バイアスの機能などに関する、一連のコンピュータ・シミュレーションと心理学実験を紹介する。

公開シンポジウム

『人間への生物学的アプローチと社会・倫理』

パネリスト（五十音順）：
安藤寿康（行動遺伝学、慶應大）
後藤弘子（刑法学、富士短大）
松原洋子（科学史、お茶の水女子大）
和田幹彦（民法学、法政大）ほか。

司会：佐倉統（科学技術論、東京大）

進化理論に限らず生命科学の立場と道具で人間についての研究を推進することは、過去何度か、大きな悲劇を生んできました。ナチによるユダヤ人の大虐殺はその典型ですが、これらの優生学的運動は過去のものではなく、その一部は現在も脈々と続いています。さらに、昨今の遺伝子配列の解読は、より科学的な根拠に基づいた新たな優生学的運動を可能にする潜在的な威力を秘めています。生物学と優生学を結びつけてはいけないということは生物学者の側からも繰り返し強調されていますが、では具体的な方途として私たちはどうすればいいのかということになると、途方に暮れるばかりです。「遺伝」という概念ひとつをとっても、コンセンサスが得られていないのが現状です。

そこで私たちは、このような悲劇を繰り返さないためにも、また健全な生物学的人間論を発展させるためにも、優生学的動向についてさまざまな分野からの展望と総括をおこなうことが議論の出発点として急務であると考えました。議論と対話の場づくりの第一歩として、優生学に詳しい科学史家や行動遺伝学の現場での研究者などを交え、この公開パネルシンポジウムを行います。お問い合わせの上ご参加下さい。

口頭発表1

空間認知能力-脳の性分化 & “オプティマル”なテストステロンとは？

内田亮子(千葉大学), 丸山 裕史(三菱総研), Richard G. Bribiescas(Yale大学),
鎌田倫子(千葉大学)、KTP(慶応双子プロジェクト)

認知能力の性差について理解を深め、その進化や適応的意義を検討するには、脳の性分化のメカニズム、個体変異の遺伝・環境要因、内分泌の影響、能力の変異性などの情報が重要である。メンタル・ローテーションテスト(MRT)は、性差が顕著で男性が得意とする空間認知課題として知られている。欧米のCAH(先天性副腎過形成)と一般集団を対象にした研究結果では、胎児期あるいは成人で標準より高いテストステロン(T)値を示す男性の場合、MRT成績が標準よりも低い傾向がある(女性は逆)。このことから、脳の性差準備が行われる胎児期、および成人で、空間認知能力に“オプティマル”なTレベルがあると示唆されている。本発表では、日本人男性について、双子を対象とした調査でのMRT成績および遊離型T値の変異パターン、そして性同一性障害者のMRT結果を報告し、空間認知能力に関わる脳の性分化とテストステロンの影響について考察する。

空間認知能力の性差ホルモンと文化人類学的視点からの解釈

鎌田倫子(千葉大学文学部行動科学科)

男性と女性には様々な違いがある。その違いの原因には進化的な起源つまり性淘汰による生物学的基盤があり、ホルモンにも影響を受けていると考えられている。しかし違いを生み出すのはそれだけでなく社会が生まれ持った素質を増幅(もしくはその反対)する。「今」の結果だけをみている限り違いは遺伝的なものだとも、社会がそれをつくったとも、両方の相互作用だともとれる。発達の過程をみる必要がある。そこでMRTテストと共にインタビューを行い、その人が置かれてきた「社会」を考慮に入れて結果を検討した。また、対象をホルモン療法中の性同一性障害とされる人々にすることでよりホルモンの影響が明らかになるのではないかと思う。

ヒトにおける配偶者の好みにもみられる性差：交際相手募集広告の分析から

小田 亮(名古屋工業大学)

これまで配偶者のもつ特徴への好みも男女で異なることが多くの研究によって示されている。例えば男性は女性の身体的な特徴や貞節を重視し、一方女性は男性のもつ資源やそれを家族へ投資する意志を重視する。これらの性差は進化生物学の観点から予測できることであり、それゆえ性淘汰によって形成されたものであると考えている研究者もいる。しかしながら、ほとんどの研究は欧米において行われたものであり、このような性差がヒトにおいて普遍的なものであるのかどうかを検討するには、さまざまな集団間の比較が必要である。そこで、日本の雑誌に掲載された交際相手募集広告についてその記載内容の性差を分析した。結果は欧米における研究結果を支持するものもそうでないものがみられた。性差の現れ方は集団のおかれた社会・文化的状況によって変化することが示唆される。

性的嫉妬の性差に及ぼす年齢の効果

富原一哉・川原歩(鹿児島大学)

性的嫉妬は配偶者防衛のメカニズムとして進化したという説がある。この仮説が正しければ性的嫉妬はパートナーの繁殖可能性の影響を受けるものと予測される。そこで本研究では、繁殖可能性と直結した被験者年齢を独立変数とし、大学生とその両親に対して質問紙調査を行った。その結果、男性においては、親世代は若者世代と比較してパートナーの肉体的不貞への抵抗感が弱く、感情的不貞への抵抗感は強いことが明らかとなった。一方女性では世代による差は明らかではなく、親世代でも若者世代同様に感情的不貞への抵抗感が強く、肉体的不貞への抵抗は弱かった。また、親世代の男女および若者世代の女性では、不貞の選択における差がほとんど認められなかったことから、「男性はパートナーの肉体的不貞、女性は感情的不貞」に抵抗するようにではなく、「若い男性が若い女性の肉体的不貞に対して特異的に」抵抗するように選択圧は作用したものと考えられる。

嫉妬、女性のコントロール、殺人

長谷川真理子(早稲田大学政治経済学部)

男性は男性を殺すことがもっとも多いが、男性が女性を殺すときの動機の半分以上を占めるのが、性的嫉妬によるものである。自分の女性とと思っていた妻、恋人、愛人などが他の男性と親しくなったとき、また、たんに自分を捨てたとき、男性の嫉妬感情は非常に強く働く。これは通分化的に見られる傾向であり、また、戦後の日本で殺人率自体は激減しても、このパターンはそのまま保たれている。本研究では、日本における性的嫉妬に基づく殺人の分析から、男性と女性の嫉妬の心理について、進化的に考察してみる。

□頭発表 2

発表希望 発表タイトル： 進化ゲームは人間行動の何を表現するのか
高橋亮（東京大・集団生物）

ヒト行動進化研究に進化ゲームが適用される場合、そこでは主に二つのreplicator dynamics が想定されていると想像される。第一に、進化ゲームが過去の人類進化過程における遺伝的な変化を表現する可能性が挙げられるが、このとき、特に複数形質の同時進化が問題とされる場面では、通常の進化ゲームは誤った進化予測を導きかねない。このことを、第二の可能性である文化過程と対比させて論じる。

言語の適応度を測定したい人のために

野澤元（京都大学大学院人間・環境学研究科）

孔雀の尾のように、特定の機能に特化した形質の適応度は比較的測定しやすいが、機能が漠然としている形質の適応度は測定し難い。しかし、それが適応的に進化したと主張するならば、適応度を測定する努力は必要である。人間の言語行動は、機能的に非常に多様であり、適応度を測定することはかなり難しい。それゆえ、言語がなぜ進化したのか、何に対して適応したのかに関する仮説は、どれも漠然としたものになる。しかし、言語行動が実際にどのような機能を持ち、どの程度の利益をあげるのかを観察・記述しなければ、仮説は仮説のままである。本論では、言語行動の機能を実際に記述し、適応度を計算するための枠組について空想する。また、一つの例として、言語使用の側面を取扱う、言語学の一分野である語用論、その中でも特に発話行為論を検討する。さらに、人間以外の動物の伝達との違いについて考える。

適応するほど遺伝率は低い？

4枚カード問題による進化心理学と行動遺伝学の橋渡しの試み

平石界（東京大学大学院・日本学術振興会）・安藤寿康（慶應義塾大学）・
大野裕（慶應義塾大学）・長谷川寿一（東京大学大学院）

推論課題として有名な4枚カード問題における個人差は、これまであまり検討されてこなかった。近年、4枚カード問題の成績と一般的な認知能力の間に相関があることが報告された。認知能力がある程度遺伝することを考えると、4枚カード問題での成績にも遺伝の影響が見られることが予測される。一方で、ヒトは進化的に獲得した能力で4枚カード問題を解いているとするCosmidesの仮説は、4枚カード問題において遺伝的影響が小さいことを予測する。219組の双生児（一卵性133組、二卵性86組）を対象に4枚カード問題を行ったところ、解答への遺伝的影響は見られなかった。認知能力スコアの得られた133組についての分析は先行研究を支持し、4枚カード問題の解答と認知能力が相関することを示した。しかしこの下位集団についても、4枚カード問題への遺伝の影響は見られなかった。これらはCosmidesらの進化的仮説を支持するものであった。

遺伝する行動は何か

安藤寿康（慶應義塾大学）

心理測定学的方法によって表された人間の心理的・行動的な形質（IQ、性格特性など）は、通常30～60%という中程度の遺伝率を示す。しかしそれらは特定の行動パターンなのではなく、一連の「類似するように見える」さまざまな行動のセットを生み出す「傾向」である。しかもそのような行動傾向の構造の一般的モデルの一つとみなされる性格の5因子（いわゆるBig Five）の遺伝構造を行動遺伝学的に分析すると、必ずしも表現型の構造が対応するような遺伝的な構造を持っているわけではないことがわかった。すると、本当に遺伝するのは行動のどのような単位なのだろうか。いっぽうで一卵性双生児の行動を観察すると、しばしば驚くほど類似した行動を独立に行っていることがある。このような遺伝的と思われる個別行動を説明するには、どのようなモデルを仮定したらよいのだろうか。ここではクロニンジャーの気質と性格の理論を手がかりに、双生児法を用いた性格の遺伝構造とD4DR、ならびに5HTTの遺伝子との関係に関する研究成果をふまえて、「遺伝する行動(単位)は何か」について考察する。

ポスター発表

社会的意思決定 多数決原理の適応基盤

藤田政博（北海道大学大学院文学研究科）、田村亮（北海道大学文学部）

亀田達也（北海道大学大学院文学研究科）

我々は、重要な社会的な意思決定を行う際に、集団による意思決定を頻繁に用いている。これは人類社会に普遍的で、狩猟採集民的な生活を送っている「基礎社会」でも、複雑化した現代社会でも見られるものである。それでは、集団による意思決定において、どのような集約原理がより適応的なのか？本研究では、まず、個人個人による意思決定を集約することで、集団による意思決定が導出されることを前提とした。そして、集約原理の違いによって、どの程度集団の適応が左右されるか、集約原理の適応価を比較検討した。その方法として、コンピュータシミュレーション、不確実性下での意思決定実験を用いた。検討の結果、我々が得た知見は、様々な状況下における多数決原理の一貫した有利さ、すなわち「多数決原理の頑健さ」である。本研究は、衆知を結集して多数決をとることが、適応上有利であることを示す一つの証拠となりうるだろう。

多数派同調バイアスの適応基盤

中西 大輔・亀田 達也（北海道大学文学研究科）

本研究では、不確実状況下における情報獲得方略としての学習の果たす役割に注目する。情報獲得方略としての学習には、試行錯誤を通じた個人的学習と他者の判断を模倣する社会的学習の2つを考えることができる。Henrich & Boyd (1998) は、社会的学習、特に多数派の意見を模倣する傾向が適応的な情報獲得方略であることを進化シミュレーションを用いて検討した。H & Bのモデルでは、個人的学習機会と社会的学習機会が無条件で全個体に与えられたが、実際には個人的学習は、単に他者の行動を模倣する社会的学習よりもコストがかかるはずである。本研究は、このような学習コストの非対称性を導入した新たなシミュレーションを行い、以下の2つの理論命題を得た。1) 変動する不確実環境では、個人的学習機会を利用する者、社会的学習のみ行う者の間で安定した均衡状態が生じる。均衡比の位置は個人的学習コストの大きさに依存する。2) 個人的学習コストが高い場合には、多数派同調の適応価は下がり、各個体は多数派同調傾向に縛られない行動パターンを見せるようになる。本研究では以上の命題を心理学実験によって経験的に検証した。

赤信号、みんなで渡れば・・・？

竹川敦・松田いづみ（東京大学教養学部）

歩行者は歩行者信号が青になったら交差点をわたる。これは子供でも知っている常識だ。しかし、歩行者は信号だけを手がかりとして交差点を横断しているのだろうか？我々は「他者の存在」と「リスク認知」の観点からこの疑問の検証を試みた。まず、渋谷ハチ公前のスクランブル交差点で信号待ちをしている集団の先頭に実験者が立ち、渡り始めるタイミングを変えて集団成員の同調性の変化(どのくらいの人か前の人につられて渡り始めるか)を記録した。また、昼(周囲が明るい時間帯)と夜(周囲が暗い時間帯)での同調性の違いについても実験を行った。赤信号であるにもかかわらず前の人につられて横断を開始してしまう歩行者は、「赤信号みんなでわたれば怖くない」原理 2番手に行動することによるリスク割引 を計算に入れているのか。それとも、信号を見るコストを省き、前の人々の動向を手がかり刺激としているだけなのか。最終的にはこの点を中心に議論できれば、と考えている。

エスノコンセプトとしての「文化」

桜井芳生（鹿児島大学法文学部）

エスノコンセプトとしての「文化」とはどのようなものかを考察する。注目すべき先行業績として、山岸俊男の文化理論を概観・評価し、その不満点への改善を目指す。筆者はトリヴァースの「自己欺瞞」のロジックをヒントにして、「他人に誠実・自分に不実」であるような現象が起きうと考える。その一つが「文化」である。とくに他者に対するコミットメントの関係を不安がっている自分の一部分を同じ自分の別の一部分が、共同性にうったえることによって、慰撫する手口、これが「文化」であると考えられる。

シミュレーションによるモデリング：社会心理学におけるシミュレーションの利用（1）

高木英至（埼玉大学）・工藤恵理子（青山学院女子短大）・

神信人（淑徳大学）・林直保子（関西大学）

コンピュータシミュレーション（モデル）は多様な要因を総合する理論モデル、およびその実行形である思考実験として威力を発揮する。社会心理学でもシミュレーションによる思考実験は研究の中に徐々に浸透している。研究全体に占める比率は大きくない。しかし仔細に見れば、シミュレーションを用いた研究例は社会心理学のほぼ全領域に見出すことができる。集団過程、対人関係、群衆行動などはもちろん、社会的場面での認知といった個人内の反応のモデルとして適用された例も数多い。シミュレーションの利点はモデル構成の容易さと柔軟性にある。特に計算上のコーディングによって数値化しにくい多様な対象をモデル化できるため、潜在的な適用範囲は数理モデルより広い。他方でシミュレーションには厳密さや結果の一般性で劣る面がある。例えば偶々採用した定式化や計算手順が結論に影響を与えてしまう。予定した結論を導くための「仕掛け」が忍び込む余地も大きい。そうした欠点にもかかわらず、モデリングの柔軟さのゆえに、シミュレーションは社会心理学の中で多くの貢献をすることが期待できる。

シミュレーションが拓く可能性：社会心理学におけるシミュレーションの利用（2）

林直保子（関西大学）・神信人（淑徳大学）・

工藤恵理子（青山学院女子短大）・高木英至（埼玉大学）

コンピュータシミュレーションは多様な要因を総合する理論モデル、およびその実行形である思考実験として威力を発揮する。社会心理学の分野においてコンピュータシミュレーションの利用が特に有効であると考えられる理由として、1) 主として内的な心理過程で説明されてきた対人行動特性を人々の中の相互作用の中に位置づけた理論を生み出すこと、2) 従来所与とされてきた（教育等により内面化されたものとして「説明」されてきた）社会的規範（衡平性、互酬性、集団意思決定ルール等）の成立基盤の解明に役立つこと、3) 進化ゲームの導入を容易にすることで、人々の相互規定の結果として生じる均衡点（マクロな社会状況）の分析が可能となることがあげられる。本発表では特に、第2、第3の点に焦点をあて、具体的な研究例をあげながら社会心理学の分野でシミュレーションが新たに拓く可能性について論じる。

動物行動学的見地から見た人間行動の諸観察例

宮川 友博（神奈川県立足柄高校）

人間行動についての私的な観察と諸文献雑誌などから適当に集めたものです。またそれから推測される試案も提示します。皆様の本格的な調査のきっかけになればと思っております。

例

男と女の違い

女に見られる「男独り占め行動」と、男の協力。

人は女の「男獲得競争」により一夫一婦制へ移行してきたのでは。

（その後牧畜農耕社会となり富の蓄積が開始されると共に一夫多妻的社会に移行か）

男が持つ群行動をしてきた証拠。

話者間の距離とジェスチャーにおける空間表現

細馬宏通（滋賀県立大学人間文化学部）

個体間距離が人間のコミュニケーションに影響を及ぼしていることはE・ホールの「かくれた次元」を始めとして頻りに主張されているが、それはしばしば各個体の内的な快不快によって語られることが多い。本研究では、個体間距離がじっさいの行動とどう関るかに焦点を当てる。実験室内で「食卓の回りにあるものを相手に説明する」という対話場面を設定し、あらかじめ用意したテキスト内容の再生課題、自分の食卓についての自由対話課題の二通りについて、個体間距離によるジェスチャーの違いを微視的に解析した。その結果、身体全体が物語空間に入る「主観的ジェスチャー」と、物語空間を手で操作する「客観的ジェスチャー」とでは、個体間距離（60cm, 120cm）によって出現頻度が違うことが明らかになった。こうした頻度差は、話者間におけるジェスチャー空間の共有のしやすさが距離に応じて変化することと関係している可能性がある。

「視線」って何？ Joint Attentionに関する実験心理学的検討

千住 淳（東京大学大学院総合文化研究科）

視覚的共同注意は、社会的認知の発達に重要な役割を果たしていると考えられているが、その認知的基盤については未だによくわかっていない。本研究では、視線の方向が受動的な注意シフトを引き起こすかどうかを検討した。PC画面上に顔写真を提示後、ターゲットを顔写真の視線方向またはその反対方向に提示し、ターゲットの位置に対応したキー入力を被験者に課し、反応時間を測定した。その際、写真の視線の方向は無視するよう被験者に教示した。その結果、視線方向に一致するターゲットの方が、視線方向の反対に提示されたターゲットよりも、反応時間がより短かった。このことから、視線が受動的注意シフトを引き起こすことが示された。また、倒立顔を用いた同様の実験でも、正立顔と同じく視線によるcueing effectが見られた。このことから、視線により受動的に注意シフトが起こることが示唆された。さらに、顔刺激そのものからの「注意の解き放ち」と注意シフトとの関連についても検討された。

ご冗談でしょう、サロウェイさん：出生順位にまつわるエトセトラ

小林哲生（東京大学大学院）・長谷川寿一（東京大学大学院）・大六一志（武蔵野女子大学）・西真理子（聖心女子大学）・平川雅子（武蔵野女子大学）・老沼妙子（武蔵野女子大学）・倉島治（東京大学大学院）

Ernst & Angst (1983) の研究以降、人間の性格に及ぼす出生順位の影響を検討する研究は下火になりつつあったが、Sulloway (1996) の「反逆者に生まれて」という本の出版以来、このテーマは再び検討されるようになった。彼は、歴史人物の資料調査と性格研究のメタ分析をもとにして、出生順位が性格形成や社会的態度などに多大な影響を与えると主張し、こうした影響の背景にはきょうだい間での葛藤があると仮定した。本研究では、Sullowayの主張をもとにして、出生順位が性格や両親との親密さに影響を及ぼしているかどうかを検討した。性格測定には、ビッグファイブ尺度とローゼンバークの自尊心尺度を用いた。またSalmon & Daly (1998) の調査を参考にし、両親との親密さも測定した。日本人大学生777名を対象に調査を行ったところ、どの調査においても、出生順位が性格や両親との親密さにそれほど影響を与えていないことがわかった。詳細な分析結果と、出生順位に関する進化論的な考察については発表会場で議論したい。

青少年・若者の犯罪動向をどう見るか？ - 凶悪化か未熟化か

長谷川寿一（東京大学大学院総合文化研究科）

近年、青少年犯罪をめぐって国民的な議論が続いている。マスコミや一般書における論調では青少年犯罪が凶悪化・暴力化しているという立場のものが圧倒的に多数を占めている。一方、長谷川・長谷川（2000）などはその根拠が乏しいことを指摘してきた。過去50年間のスパンで見ると90年代の殺人による少年検挙者数はピーク時の4分の1以下であり、国際比較でも日本の少年犯罪が凶悪化している論拠はない。むしろ、10代半ばから20代半ばの日本人若者男性は、他の文化圏の男性と比較して極端に殺人率が低い。本発表では、進化心理学的視点から男性殺人の年齢効果について論じ、なぜ戦後日本では若者男性の攻撃傾向が低下したのかを考察する。